洛書

仏哲学（フランス）から仏教学への道

Marc-Henri DEROCHE

フランスにいた頃，私は哲学から，次第に東洋学と仏教学に研究の焦点を移しました。アジアの様々な国，特にチベットやヒマラヤ地域で現地調査をするたびに，その国の人々から，なぜ仏教を研究するのかと訊ねられます。簡潔な理由を述べるのは，容易ではありませんでした。しかし，2008年の京都大学の仏教学専修への留学を機に，高名な指導教授のおかげで，シンプルな答えを日本語の中に見つけたのです。つまり，私の国フランス（仏蘭西）は，「仏国」と呼ばれていたのです。

日本の皆さんの笑いを誘う，単なる語呂合わせのように見えますが，実はこの「縁」にはもっと深い意味があります。日本とフランスの仏教学研究は，1929年作成開始の共同編纂辞書『宝法義林』以来，長きにわたって協力関係を築いてきました。そればかりか，現代フランス哲学をはじめ西洋には，他の伝統との真の哲学的対話を切り開く新たなパラダイムを追求してきた，自己批判的思索が存在しています。

著名なフランス人思想家の一人エドガール・モラン（1921- ）は，科学の時代が抱えるパラドックスを巧みに指摘しています。科学的知識と技術が大きく進歩した一方で，我々は専門化し細分化した学問を教え込まれ，それらのつながりを築いてこなかったため，知識の全体像は解けないパズルの様相を呈しています。要するに，（部分として）知れば知るほど，（全体として）より無知になる，というわけです。この認識論的パラドックスは悲惨な結果をもたらします。つまり人間は，途方もない科学技術の力を発展させた反面，その全体的かつ長期的結果については新たな盲目を生み出しているのです。知識の新たなパラダイム，思想の改善，また統合的洞察力の探求が必要です。その中で「humanities」（人文科学）の貢献は不可欠でしょう。モランは「to save Humanity by realizing it」と表現しています。「Human」（人間）として生存するには，「humane」（人間的/人道的）であるべきなのです。

これを目的として，コレージュ・ド・フランスの前教授であるピエール・アド（1922-2010）は，哲学言説，生の在り方，そして彼が「精神の修練」と呼ぶものの分析を通して，古代西洋哲学を「智慧への愛」（philosophia）として見事に再定義しました。その著書の結論でアドは，アジアの伝統との著しい類似点について特筆し，生の様式としての哲学という古代の理想を再現するためにアジアの伝統を学ぶことを奨励しています。私はこの観点から「アジア哲学」を研究しています。これは，知識に関して驚くべき全体論的モデルを提供しています。特に，言語と現実，主体と客体，そして異次元の経験の関係性について高い見識をもっています。理解を具体化することを提唱し，三段階の智慧の発達に即した全人格，身体と精神，脳と心の教育を促してきました。すなわち，教えを聞き（聞），その意味を思案し（思），人生を通じて陶冶する（修），というものです。特に「修」という概念は，日本の伝統芸能や人間らしさを培う様々な「道（どう）」の良い例です。私にとっては，弓道の修練が人生の原動力となっています。

この文化的遺産にもとづく私の研究を，「学問の木」になぞらえてみましょう。根は，文化財学，史学，古典文献の詳細な解読です。幹は，それらの人類学的・哲学的検討です。枝や実は，学際共同と現代社会への新たな応用です。ここ京都では，西田幾多郎や京都学派などの優れた貢献を直に学ぶことができます。白眉センターを経て思修館に勤務する今，自然の美と千年以上に及ぶ文化を擁する学問の山ともいえる京都大学の真価を実感しています。

（マルク=アンリ・デロッシュ　総合生存学館（思修館）准教授，専門は仏教学，宗教学，哲学）